

43. 7. 17 於 神戸市立湊川高校会議室

助言者 兵庫県教育委員会 広幸乙彦氏

司会者 鳴尾高校 仁王春樹, 本庄中学 田中晴夫  
妙法寺小学校 谷口博の各氏

出席者 (柏原) 永井・仲井, (園田) 土居, (山崎) 大上, (琴丘) 丸尾, (福岡) 西本, (洲本) 石上, (葺合) 東, (妙法寺小) 谷口, (須磨浦) 橋本, (明石南) 稲葉, (鳴尾) 仁王 (淡川) 小久保・浜田, (生田中) 中島, (滝川) 佐藤, (灘) 寺沢, (神戸西) 松本 (三原) 長野, (刈藻中) 水野, (明石) 平畑, (本庄中) 田中, (魚崎中) 藤本, (長田) 安房

**経過報告:** この数年來、特に教科研究についての生物学会の活動を批判する声が高まり、その1つとして43年度の会総でカリキュラム研究会の発足を見た。具体的内容についてはこの会で決めることになっているので、本日は単にカリキュラム問題に限らず、教科に関するいろいろな問題を出し合ってもらい、何等かのこれからの方向を見い出せばよいのではないかと思う。

**TG:** 小・中学校関係者の出席が少ないので今日は高校側から意見を大いに出してもらい、それを小・中学校側に流すようにしたい。

**IG:** 高校のカリキュラムは事実上大学の入学試験によって強く規制された形であり、変えようがない。しかし例の高校入試が科目別を廃止したという兵庫方式の採用によって、小・中学校でのカリキュラムは、大いに現代化という手術ができるのではないだろうか。特に小学校の高学年から中学校の1、2年生時においては、生徒の知的成長が相対的にバランスを持って伸長するので、この時期のカリキュラムは特に留意すべきだと思う。

**TN:** 高・中・小の学校間での話し合いはほとんどなされていないので、このような会合は誠に有意義だと思う。お互いに学校の内容を本当は知らないのではないかと思う。中学校について言えば、授業内容も自分で疑問をもち、そして解決する努力の出来る学習、つまり自主学习に変ってはきているが、父兄から従来通りのつめ込み暗記式授業への要望が強く働いて、実際にはあまり良い方向に進んでいるとはいえない。

**TG:** 夏休みの宿題廃止のかけ声のために少し変わったが、小学校でも父兄が承知しないで自分達が練習などをやらしているものもあるようだ。生物教材は小学校の低学年に多いが、実際の現場では、低学年を担当している教師に生物に強い人が少ないため、結局は教科書とブ

リントだけの理科教育に終わっている。

**HH:** 小学校の専科制はどうなっているのか。

**HK:** 芦屋・西宮で5年、6年についてだけ実施しているのに過ぎない。

**TA:** 神戸市でも2~3校でやっている。しかしこの場合、児童生徒と先生との人間的な結び付きが問題になってくるようだ。そのために、たとえ先生の方が専門家であっても、指導上のことからか、かえって逆に理科が嫌いになって行く場合もあるようだ。

**H:** 高校の内容が大学の入試に影響されているということだが、何とかそれにとらわれない授業をしたいものだ。しかし、現実には物化系重視の社会的風潮から、カリキュラムでも5単位から4単位への格下げに伴う生物系教師への圧迫などが受験科目重視の巻きぞえとなっている。これらを排除するために生物教科の内容を魅力あるものにするのが大切だと思う。そのときに小・中・高と一貫したカリキュラムを作って、各学校で思い切った授業をすれば相当に魅力が出てくるのではないか。小・中・高でそれぞれ同じようなことを何度も重複して教えているのがあるが、このようなことが生徒に魅力を失わせる原因にもなっていると思う。

**TN:** 高校へ入った中学の卒業生は、中学校の先生に、理科の2分野で習ったと同じことをまた習っていると云っている。

**IG:** 物理とか化学とかいうワクをはずして理科の授業をやったらどうだろうか。

**NO:** 生物を軽視するという内容に2つある。1つは現代化の面から、生物は自然科学に入らない——科学ではないという面である。

**A:** 物化とのワクをはずすのも1つの方法だが、生物という範囲内で大いに特徴づけるのも必要ではないか。

**O:** 受験科目で生物が圧迫され日陰者になっているという話だが、生物は花形ではないからこそ、逆に思い切った教育が出来るのではないだろうか。真に教育的に見て生物が日陰者でなければ、それでよいのではないか。別に憂うる必要はない。

**NO:** 生物が軽視されたということは、すでに38年度の教育課程の改訂のときに中央の教育課程審議会の生物関係のメンバーの1人であるM氏が言った言葉の中に明らかにされていることを私は取り上げたのだ。

**NA:** 私は高校時代に、いわゆる受験生物を学んで大学の生物学科へ入った者だが、大学に入って初めて生物学の本当の内容を知って驚いた。いま中学校で教えているが、何とか中学ででも自然科学としての生物を教えた

いと思ひ努力している。

NG：神戸支部だけでなく他の支部でもこのような会合を開いたらどうだろうか。

注——この日の会は現代生物学セミナーの一環として取りあえず開いたもので、単に神戸支部の行事としてでなく本部行事として開いたが、阪神神戸、東・西播の参加が多かった。

O：竜野支部では時々やっている。

HI：生物は決して軽視されていないと思う。

A：学問の世界では重視されているが、日本の初等教育の現状では軽視されているとみてよいか。われわれとしては、その考えをどういうふうにして変えて行くかを考える必要があると思う。

NO：その具体策はどうか。生物学会の支部単位の行事として教育課程の研究会を持つというのは一案だと思う。竜野支部で行なっているのは理科第一分野を中心にしての研究会のようだが——

TN：神戸支部ではもっと支部活動を盛んにしようという声が高い。

NI：氷上支部では38年頃に小・中学校のお世話で研究会を開いていたようだが。

TN：生物学会の行事といえば採集会だけのようになっているので、もっと魅力ある各種の活動をすべきだ。

TG：小学校では理科としての教科研究会を持っているので、小学校だけの問題については研究が進んでいる。

NO：サークル活動では常に理論的指導助言者が必要である。また、その会が永続きするためにも是非そのことを考えるべきだ。

IG：生物教育とは何か、というもっと根本的な考え方について問題を提示する必要はないか。何故生物という教科があるのか、それはどうしても必要な教科なのか何故それは必要なのか。生物教育の現代化というかけ声は高いが、それはかけ声だけに終わっているのではないか、実際には単にトビックスをとらえているだけで、内容的にはあまり進んでいないのではないか、そういうことも結局は生物という教科を本質的にどうとらえるかということではないだろうか。

NO：各支部で、できたらカリキュラム研究会を開いて何等かの話し合いを進めて行くことが必要だという一応の話し合いになったと思う。

OG：セミナーで研究授業なども取りあげたらどうか。また、大学の先生の話の最後に必ず教材の取り扱いを入れてもらったかどうか。

M：私の地区では小・中・高の連絡会をやっているが、お互いにどんなことをやっているか全然知らなかったのが、その会を通じてよく知るようになり有為だったと思う。小・中・高で共通なものを取り上げて研究してはどうか。

A：小・中・高共通のテーマはなかなかむずかしいが「消化」というテーマはどうだろうか。これなら小・中・高ともそれぞれ取り扱っているし内容もいろいろだろうと思う。教材の重複を知る上でも好適の材料と思うが。

NO：次回は「消化」をテーマに小・中・高で実際に何を教えているかを紹介して貰い、教材の一貫性を中心に討論を進めて行くことにする。できれば2～3カ月に一度このような会を開いたらという声もあるので、そのように努力する。大学からの助言者として神戸大学の中西氏を迎えたらという意見が大きいので、その交渉を進めて行く。以後の会の進行については本日の司会の三氏が引き続き事務を遂行して行くことを了解されたい。

## 第2回カリキュラム研究会

日時 43年12月2日(月) 14:30～18:00

場所 神戸市立教育研修所

テーマ 小・中・高の共通教材について。とくに「消化」

発表者 県立明石南高校 稲葉通二、本庄中学 田中晴夫、妙法寺小学校 谷口 博

指導助言者 県教育委員会

学校指導課 広幸乙彦主事

司会 県立鳴尾高校 仁王春樹

資料 小・中・高の各教科書